魔女の娘の来訪者

アレナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔女の娘の来訪者

【Ｎコード】
Ｎ１３４３Ｚ

【作者名】
アレナ

【あらすじ】
お母さんは、異世界から来た「魔女」だ。
でもわたしにそれは関係ない。力も受け継いでない。珍しい黒髪だって、わたしのものにはならなかった。
なのに今でも「魔女」と「魔女の力」を求めて人々は娘のわたしのもとへやってくる。
こんなに最低なことってあるだろうか。
普通に暮らしたい普通の町娘リサのあまり普通ではない物語。

プロローグ

目が覚めるとそこは異世界だった。
それは、一体どんな気分がするんだろう。わたしにはわからない。そんな経験をしたことなんてないから。胸がわくわくするんだろうか？それとも不安でいっぱいで、泣き出したくなるんだろうか？あるいはそんな感情を覚える前に、事件とかに巻き込まれるのかもしれない。

お母さんは、いつかわたしにこんなことを言っていた。
「帰りたくて、怖くて、死んでしまいたいとも思ったけど。でもわたしが今こうしているのは、友人や、周りの人や、そしてあなたのお父さんがいてくれたからなのよ」
だから幸せだと。そういっていた。お母さんは笑っていた。

この国には、昔からこんな伝説がある。

王国に暗黒の雲がかかったとき、
異なる世界から降臨する黒髪の魔女、
その奇跡の力を以って、
王国を導き、救わんとす

こんな伝説を信じるのは、小さな子供と頭のおかしいひとだけだ。
正確に言えば、『だけだった』。
１８年前のあの日、この国の人間はその伝説が本当だったことを知る。

本当に、この国の人間ではありえない、黒髪を持つ娘が空から降ってきたのだ。そして彼女は、様々な困難や危険を乗り越え、その『奇跡の力』を使って、国に暗雲をもたらしていた邪教の集団を解体し、国や王を救ったそうである。

だから今でも黒髪の『魔女』は王国の救世主としてあがめられ、たたえられ、人々の尊敬の念を集めている。

今、『魔女』はそのとき一緒に戦った騎士と結婚し、子供をもうけ、幸せいっぱいに暮らしている。

冒険小説は、普通はここで終わるのだろう。めでたしめでたし。ハッピーエンド。

しかし現実は小説じゃない。そこから何十年も続くのだ。

みんなは知らない。小説に描かれないその後の未来がどんなものなのか。生まれた子供がどんな生活を送るのか。

わたしのお母さんは、異世界から来た「魔女」だ。

プロローグ（後書き）

新連載です。ライトな恋愛ファンタジー、の予定。

狙われ、襲われ、助けられ

「お前リサ・グランフォードだな？」
学院からの帰り道、道端で見知らぬ男に突然呼び止められ、リサはまたか、と嘆息した。
これがいわゆるナンパならどれだけよかったことか。こういう風に呼びかけられ、続く言葉は「一目ぼれしたんだ」なんていうのがロマンス小説の王道だろうに、悲しいかな、これはロマンス小説でもなんでもなくリサにとっての現実なのだった。
「何の御用ですか」
冷たく聞くリサには答えようともせず、男はいぶかしげにリサをじろじろ眺めまわす。
そしてリサの髪に目をとめた。
「ふん、ほんとに髪色は茶色なんだな。本当に『魔女』の娘なのか？」
やっぱり、と顔をしかめ、男を無視してリサは歩を進める。おい待て、と手をつかまれ、彼女はきっ、と男を睨みつけた。息を大きく吸い込み、ありったけの声で叫ぶ。
「この人痴漢ですー！！！！！！！」
わらわらと学院の生徒が寄ってきたのを見て、男はあわてて逃げ出した。ふん、とリサは鼻を鳴らす。生まれてこの方１７年、誘拐されかかること何百回。対処法くらいわきまえているのだ、見くびるなよ、と走り去る男に舌を出した。

彼女ーリサは至って普通の娘だ。醜くはないが特別美人でもない、十人並みな容姿。王立学院においても平均ちょっと上くらいの普通の成績。これといった特技があるわけでもなく、少々お転婆で気が強いくらいの性格の、ごくごく普通の町娘。

ところが、彼女の家ー正確に言えば彼女の両親は、普通ではなかった。

１８年前、このアレディア王国を危機が襲った。王家の人間が次々に病に倒れ伏し、不安にかられた国民たちはそのとき台頭してきた邪教にのめりこんでいった。原因はその邪教集団の呪いだとわかったこの国の王子は、一人でなんとかしようと奮闘した。

ところが相手も生易しい相手ではない。傷つき困り果てていた王子の手助けとなったのは、突然空から降ってきた黒髪の娘だった。

『魔女』の伝説を知っていた王子はその異世界の少女に協力を仰ぎ、その異世界の少女は、王子の護衛をしていた騎士や彼女の友人となった人々、そして王子と一緒に邪教の神官を滅ぼしたのである。

その『魔女』ナツコと、彼女と恋に落ちた騎士ダニエル。そのふたりの子供が至って普通の彼女、リサだった。

それゆえリサは、生まれたときからある意味特殊な環境下にいた。黒髪の『魔女』は今でもこの国の英雄だ。そして彼女の持つ『奇跡の力』も国民に広く知れ渡っている。その『魔女』の子供が娘であると知った多くの人々はこう考えたのである。

娘に、『奇跡の力』が受け継がれているのではないか、と。

実際のところ、リサにはなんの力もない。髪色も、この国の半数と同じ茶色だ。けれど、『魔女』の娘という価値を見出し、それを利用しようとする人間はあとをたたなかった。加えて『魔女』の娘を娶り、『魔女』の血縁になって権力を得ようとするものも大勢いた。だからリサは……もっと言えば『魔女の娘』は、生まれたそのときから多くの人間にその身を狙われ続けてきたのである。

それに、とリサは自分の長くはない半生を思い返す。物心つく前から大人には狙われ、子供には媚を売られるか、もしくは遠ざけられてきた。『魔女』の娘にうかつに近寄って不興を買いたくないと

いうことなのだろう。小さな町だったからかもしれない。父はナツコと結婚したあと騎士をやめ、小さな町に引越し、そこで商売を始めたのである。だから、リサはある意味有名人だった。悪目立ちしていた。友達も出来なかったし、あの町にいい思い出はほとんどない。

明るく優しく、リサを守り、愛してくれる両親のことは大好きだ。けれどあの環境が辛くて、15歳になったとき、リサは王都にある王立学院に入学するため家を出た。

それから最近まで、それまでからは考えられないほど平凡な日々をすごした。王都には大勢の人がいる。誰もリサが『魔女』の娘だなんて知らなかったし、たくさんの友人も出来た。不幸なことに恋人という存在は作ったことはなかったが、それでも彼女の生活は充実し、楽しい学生最活だった。

ところが、ここ半年くらいでまた身の危険が増えた。今日のように声をかけられるだけならまだしも、力ずくで誘拐されかかったことも1度や2度ではない。

リサにはその理由がわかっていた。

もうすぐリサが18歳になるからだ。

結婚が許されるその歳に。

何より一『魔女』がこの世界に降り立ち、そして『奇跡の力』を覚醒させたのと同じ歳に。

やっとの思いで現在の住まいであるアパートに帰ってくる。部屋に入り、ふう、と息をついた。そこでしまった、と気づく。食材を買ってくるのを忘れたのだ。もう買いだめの分はほとんどない。帰り道に市場に寄ろうと思ったのに、どっかのバカのせいですっかりそのことを忘れていた。

「ほんと迷惑……」

悪態をつくと、脱ぎかけたコートを再び着なおし、リサは外へ出

た。

「あら、リサどこか行くの？」

階段を下りると、隣人であるリッカに出会った。ちょうど帰ってきたところらしい。そこの市場まで、とリサが答えるとリッカは少し眉根を寄せた。美人のリッカがやるその仕草は憂いがあって艶っぽいとリサは思う。

「気をつけなさいよ、なんだか最近物騒だから」

「うん」

曖昧に笑う。物騒なのは自分……というか自分を狙うバカのせいだ。近所でも評判の美女のリッカにもその被害が及んでいるかと思うと申し訳なくて涙が出る。しかし彼女に自分の素性がばれるわけにもいかないので、「ほんと最近変態が多いよねー春間近だからかなー」と誘拐犯をひとくくりに変態呼ばわりしておいた。

リッカと別れ、夕焼けのなか市場へ急ぐ。さすがに日暮れまでには帰りたい。

なのに。

「リサ・グランフォード」

またか、とリサは舌打ちした。先ほどの変態、もとい誘拐未遂犯の男がそこに立っていたのである。

人通りの少ない道。叫んだら人は来てくれるだろうか。

「だからなんなのよ！わたしには何の力もないんだっていってるじゃない」

「いつあの『魔女』みたいに力を覚醒するかわからないからな。お前を捕まえておいて損はないだろう」

「思考がぶっ飛びすぎなのよ！」

勇ましく怒鳴る。そして昼と同じようにまた叫ぼうとして、それは後ろから伸び出てきた大きな手に塞がれた。

「もがっ」

「さすがに何度も同じ手は食わないさ。仲間を連れてきた。大人しいガキかと思ったら、あんな大声で叫ぶなんて、鼓膜が破れるかと思ったぜ。彼氏もいないわけだよな」
にやにや笑われる。余計なお世話だ、とリサは思った。もちろん文句をつけようとも思ったが、力強い手が口を塞いでいるせいで彼女の言葉はもがもがと吸収されていく。

「なんならオレたちが男を教えてやろうか？」
下卑た笑いを浮かべ、男がリサに近寄る。なんで、なんだってわたしはこんな目に合わなくちゃならないんだ。こんな最低なことってあるだろうか。バカ、変態、ロリコン、滅びろ。思いつく限りの罵詈雑言を心の中でわめく。リサの瞳は怒りの炎と恐怖の涙でできらめいていた。

男の手がリサの顎にかかる。
最後の最後には舌でも噛み切ってやる、と近づいてくる男を睨みつけていると、ふいに男がピタリと止まった。
「……？」
そして、リサを羽交い絞めしていた男の手の力も弱まる。
彼女は解放された。
そこで、ようやく誘拐犯たちの背後に、王国騎士団の制服を来た男たちが立っているのに気づいた。

「あ……」
「大丈夫ですか」
リサを羽交い絞めにしていた男をすばやく捕縛すると、彼女と同じくらいの年齢の青年が心配そうな顔でリサに走り寄ってきた。優しげで穏やかな瞳が曇っている。その様子に思わず子犬を思い出したリサは笑みを浮かべて「大丈夫です」と答えた。

リサの正面にいた男を捕縛していたのは、大柄で精悍な顔立ちの青年だった。リサがお礼を言おうと視線を向けると、にぱっ、と笑う。野性的で精悍な顔立ちに浮かべる何のてらいもないその笑顔は、リサの気持ちをこれ以上なく安心させた。

「大丈夫かー？いやー、お嬢さん勇気あるねえ。あんな場面で敵のこと睨みつけるなんて、コイツより度胸あるよ」

コイツとは、リサに駆け寄ってきてくれた子犬のような青年のことらしい。ひどいですっと彼が膨れる。リサはもう大丈夫だ、という安堵を覚え、深く頭を下げた。

「助けてくださって、ありがとうございました」

その言葉に、大柄な青年は微笑み、優しげな青年は照れたように笑う。ところが、その大柄な騎士が続けた言葉は、リサの予想していたものとは少し違っていた。

「いいのいいの、困ってる国民を助けるのが俺たちの仕事だからね……といいたいところだけど、時にお嬢さん、ちょっとお願いがあるんだよね」

「……なんでしょう」

いぶかしげに、彼を見つめる。その視線に苦笑して、彼はそっと懐から金色に輝くボタンを取り出して、リサに手渡す。

「一緒に来てもらえるかな、お嬢さん」

その言葉に、リサはため息をついた。

生まれたときからストーカー、筆頭

『魔女』は、その仲間だった王子と騎士に、友情の証として彼女が着ていた制服の金色のボタンをひとつずつ渡したのだそうである。

しかし、彼女も17年後、そのボタンがこんな使われ方をするとは思ってもみなかっただろう。

「ちょっと、いい加減にしてください！今月はこれでもう3回目じゃないですか！」

ぷりぷりと怒る『魔女』の娘に、カイザーは微笑を隠しきれなかった。怒ったときの仕草は、母親であるナツコとまるで同じだ。自分は『魔女』にはまるで似ていないと言い張るリサだが、しっかりナツコには似てきている。

「まあそう怒るな。余が騎士団を送ったからこそお前は助かったのだ、お礼くらいもらっても罰はあたらんだろう？」

ん？と首をかしげると、リサはふい、とそっぽを向いた。

それを見てはらはらしているのは周りにいる女官たちである。何せこの国の最高権力者、アレディア王国第65代国王カイザーにこんな態度を取るのは、世界広しといえどこの娘だけなのだから。いつ不敬罪で首をはねられてもおかしくない、その態度にやきもきする周囲に気づいているのかいないのか、リサはぼそりと照れたように「ありがとうございました」という。

こんなところが可愛くて仕方ないと、カイザーはにやけた。

18年前。自分の両親や兄弟が原因不明の病に倒れた。どうしようもなくて、もう死にたいと絶望していたときにあらわれたのは伝説の『魔女』。ともに戦い、かけがえのない友情を育み、それはい

つしか恋情にまで成長したが、彼女は自分ではない男を選んだ。そのことを恨んではいないし、むしろ本当にいい友人たちだと思っている。そしてその大切な友人たちの娘がすぐそばの王都で暮らしていて、そして時に身の安全を脅かされているのならば、助けるのも当然だとカイザーは思う。

しかしリサはそう思っていないらしい。王城に呼び寄せる合図として使いの者にナツコからもらった金色のボタンを渡すたび、それを握り締めてリサはカイザーの執務室へやってくる。そして「もう！気軽に呼び出さないでください！」と怒りながらも律儀に彼の招待に応じるのである。

「わたしは一般庶民なんです。お城にわけもなく来るなんてどう考えてもおかしいでしょう」

困ったようにそう告げるリサに、カイザーは悲しげな表情を浮かべた。

「そう言うな。お前と話している時間はこんなにも楽しいのだから」

実際、権謀術数のうずまく城で王として気を張り続けるのはとても辛いことだった。この素直で気の強い娘と軽口をたたいている時間は、それこそ18年前に戻ったようでカイザーの癒しとなっている。

「そもそもお前、一般庶民だというわりには国王に向かってそのような口をきくではないか」

「仕方ないじゃないですか。生まれたときから月に1度は会っていたおじさんがまさか国王だなんて思わなかったんです」

ことあるごとに城へ呼び寄せたり、お忍びでナツコとダニエルのもとに行ってたからな、とカイザーは苦笑する。そして彼女が王都に越してきてからはこの調子だ。国王というより確かに親戚のような気がしてもおかしくない。

それにしても。

「おじさんはないだろうリサ。余はまだ３４だぞ」
悲しげに呟いたカイザーに、リサは「おじさん」と言い募った。３４歳、男盛り。色気のあるその容姿は国中の娘の憧れらしい。リサの友人たちも口々に彼をたたえていた。リサにはまったくわからなかったのだが。そこで彼女はふと思い出した。わからないといえばもうひとつ。じと、とカイザーを睨んで低い声で言う。
「そういえば、また新しく側室を迎えたそうじゃないですか」
「ああ、ウェリウス伯の娘か」
「……節操なし」
ぼそりと呟かれた彼女の言葉にカイザーは苦笑いを浮かべる。確かに正室１人に加え側室６人をも持てば、純情な乙女であるリサにそういわれても仕方ないかもしれない。
「言ってくれるな。お前ももうそろそろ１８だったな、学院を卒業したらどうするのだ。余に嫁ぐか？爵位こそないが、『魔女』の娘なら迎え入れても誰も文句は言うまい？」
愉快そうに瞳をきらめかせるカイザーに、リサは「拒否します」とにべもない。すばやい却下に、もはやカイザーは大声で笑った。

「なんだか、楽しそうな悪巧みですわね？」
エリザベス王妃が部屋に入ってきたのは、その時だった。アレディア王カイザーの正妃。美しい女官を何人も連れてはいたが、その中で彼女の美しさは群を抜いている、とリサは思う。

「エリザベス。悪巧みとはなんだ」
王妃の言葉に、カイザーは彼女に近寄り、エリザベスの頬に軽く口付けをする。エリザベスはそれをくすぐったそうに、しかし嬉しそうに受け入れてから、「だって」とリサの方を向いて微笑んだ。
「わたくしの可愛いリサをあなたの妾妃程度にするなんて、もったいなくてよ。確かに後宮にこの子がいてくれたらわたくしのこころは慰められますけど、リサにはもっと素敵な人生を歩んでほしいわ」

王妃の言葉に、カイザーは苦笑しリサも曖昧に笑った。7人の女性が暮らす後宮に、あまりいい噂は聞かない。それを取り仕切るエリザベスがもっとも身にしみて感じるのだろう。朗らかに、冗談めかしていうその言葉こそ本音なのだろうとリサは思った。

ずっと昔、エリザベスのことすら恐れ疑ってかかった自分を恥じる。今では彼女が王妃にふさわしい、たおやかで本当に心の美しい人だと知ってはいるけれど。

「心配なさらず、殿下。わたしは普通に町娘として平凡に暮らしたいのです。学院を卒業したら、どこかの家の家庭教師にでもなって静かに暮らしますから」

「しかし、周囲はそう思ってはいないだろう」

リサの言葉に対し、急に固く真剣みを帯びた口調で国王に返され、苦々しげに彼を見る。王も、そしていつも笑顔を絶やさない王妃でさえも険しい表情でリサを見ていた。

そう、彼女自身が一番よく知っている。『魔女』の娘である自分が、これから先どう見られるかということを。

「今日お前を呼んだのは、単に世間話がしたかったわけではないのだ。リサ」

リサは、居住まいを正した。

「最近、お前の身、そして命を狙うものが急増しているな」

王はなにやら書類をぱらぱらめくって言った。生まれたときからストーカー被害にあっているリサだが、その筆頭はこの国王なのではないかとよく思う。それでも彼には、口では何かといいながらも親愛の情を抱いているから、嫌な気はしない。しかし、そのほかの輩は別である。

「お前と婚姻関係を結び、『魔女』の縁者となって権力を手にしようとする者。『魔女』の『奇跡の力』を手に入れることで力を得ようとする者。おまえ自身が『奇跡の力』を目覚めさせることを恐れ

る者。そして１８年前の邪教集団の残党。考え付く限りでも、お前を狙うものは多種多様だ」
「よりどりみどりだな」と冗談めかして言うカイザーに、リサはため息をついた。どうせよりどりみどりなら、恋人候補がよかった。ある意味恋人候補のヤツらもいるが、権力欲に溺れた者など願い下げである。

国王の言葉を引き取ったのはエリザベスだった。
「あなたの恋人と言う立場を狙うならまだいいの。リサは賢いから、心配していないわ。けれど、命を狙う者への対処は、あなたには無理だわ。だからね、考えたの」

王がなにやら合図すると、執務室の扉が開き、騎士団の制服をまとった二人の青年が入ってきた。見たことある、と思ってリサが彼らをじっと見てみると、それもそのはず、リサを先ほど助けてくれた二人だった。
彼らはリサを見つめたあと、静かに、その場に跪いた。
「え？えっ！？」
まるでおとぎ話のプロポーズのようなその光景にリサが動揺すると、国王夫妻は楽しそうに笑った。
「今日から、彼らはあなたの騎士よ」

護衛、一日目

いつもと変わらない我が家のはずなのに、なぜだかどうも落ち着かない。

とはいえ、その理由は明白だった。

「あの」

「はい」

「家に上がったり、とか」

「いえ！僕はあなたに仕える騎士ですから！」

凛とした態度で、しかしやはりどこか柔らかい表情で微笑まれ、リサはうーん、とうなった。

『魔女』に振り回される娘の運命を、どこか楽しんでいるような節すらあった国王夫妻から驚きの一言をいただいたその翌日。本当に騎士はリサの元へとやってきた。『魔女』の娘を狙う者から、彼女を守る役目を仰せつかったようである。

リサの住むアパートの1階、彼女の部屋へとつながる階段の下に、現在進行形で立っているのは、昨日彼女を助けてくれた子犬系な青年騎士だった。

女性の部屋へと入ることは騎士として言語道断、とばかりに、彼はそこから動こうとはしなかった。冬ももう間近のこの時期、寒空の下は辛くないだろうか。そう思ってリサが声をかけても、笑顔で拒否されては彼女もどうすることも出来ずにいた。何より、国民の憧れ、王国騎士団の制服を身にまとったそれなりに見目麗しい青年が似つかわしくない学生御用達の安アパートにいることが、目立って仕方ない。本当なら、部屋の中にでも隠しておきたいのだけれど。

かくなる上は、この人がわたしとかかわりないということにしよ

う。
リサはそう決意すると、「じゃあ」と騎士に会釈して、部屋の中へと戻った。午後からは授業だ。準備をしなくてはならない。

ところが、である。
「ちょっとリサ！どういうことなの！？」
隣人リッカが興味津々、といった風ににやにやとリサに笑いかける。リサは心底不機嫌な顔をして、リッカ―ではなく、その後ろに見える騎士をにらみつけた。
離れたところで、青年の目が涙目になったのが見える。
「どうもこうも知らない。わたしには関係ないもの」
「だってあの騎士様、『僕はリサ様の騎士ですから！』って言ってたわよ？」
余計なことを、と舌打ちをする。リサの迫力ある表情に気圧されたのか、かわいそうなほど青年騎士は震え上がった。こんな小娘一人にびくついていていいのか、と不安にならないこともないが、今問題にするべきはそこではなかった。

学院へと続く道。午後からの授業のためにリサがそこを歩き出すと、当然のように騎士もついてきた。多少離れてはいたが、傍から見れば彼がリサの後をついて回っている（おそらく護衛ということだろう）ということは丸分かりだった。が、この町の人間は、リサの事情なんて知らない。花形職業の騎士が、何の変哲もない町娘をつけ回している図は、たいそう怪しく、不可思議なものに違いなかった。
「最近物騒だからじゃない？わたしがこの前町の自衛団に相談したから、調査に来てくれてるんだよ」
「まあ」
とっさに言ったリサの言葉に、多少首をひねりながらもリッカは

納得したようだった。
「確かに、あんたも最近変なのに声かけられてたものね」
そうそう、とリサはうなずく。それだけで騎士団が動くとは到底思えないが、わざわざまぜっかえす必要もないだろう。自分と王の関係を知られるのはまずい。せっかく出来た友人だ。
しかし、これはなんとかしないと、とリサは渋い顔でこっそりため息をついた。

授業を終えて帰宅の途につこうとすると、影でこそこそしている青年を発見した。授業中は一体どうしていたのだろう。まさかずっとこそこそ隠れているのがもろばれしているようなこの感じで護衛をしていたわけじゃあるまい。リサはなんだか頭痛を覚えた。
それでも一切彼とは係わり合いになるものか、と見て見ぬふりをする。
そうしてやっと家に帰ったときには、精神的に疲れきっていた。

「あの」
「はい！」
数時間ぶりに声をかけると、青年はまた元気よく返事した。
「お疲れ様です」
「とんでもありません」
優しく笑う青年は、きっといいひとなんだろうな、とリサは思った。自分が当事者どまんなかでなければ、多分友達として仲良くなるくらいは出来たはずである。しかしいかんせん職務熱心なんだか若さゆえの情熱なんだか、少し仕事に熱中しすぎだ。少しは自分側の立場も考慮に入れてくれてもいいのに。
「あの、わたしもう今日は家出ませんから。だから帰ってくださっていいですよ」
「そういうわけには」
「いやもうほんと帰ってくださいお願いします」

リサの懇願が通じたのか、困ったように眉を下げ、ややあってから青年騎士は「かしこまりました」と静かに言った。

「明日はわたし授業がないので外に出ませんから護衛は結構ですよ」

「明日は僕ではなく、ジェドさんがいらっしゃいますので」

二人の言葉が重なる。「え？」とリサが聞き返した、その隙ににこやかに青年は繰り返した。

「明日は僕ではなくジェドさんがいらっしゃいますので、安心してくださいね！では！」

さわやかに敬礼をし、にこやかに去って行く彼。

「ちょ、護衛はいらないって……話を聞けっ！」

リサの叫びだけがむなしく夕闇の町に響いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1343z/

魔女の娘の来訪者

2011年12月11日02時48分発行